坂総合病院　QI ニュース　〈第 22 号〉2015 年 5 月号
坂病院医療指標ホームページ：http://www.m-kousei.com/saka/qi/
発行責任：坂総合病院 QI 委員会

コラム　アンケートに関する細々しいこと

QI 委員　　診療サービス課　山本　あゆみ

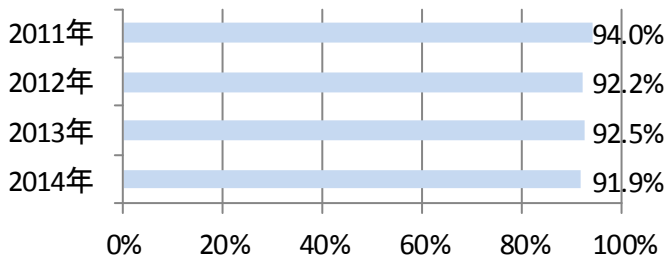
朝のニュース番組などを見ていて、生活から政治まで世の中の様々な事柄についてアンケート調査を行い、その結果について特集していることがあると思います。そのとき、円グラフなどで意見の割合が示されているのですが、その結果を見ていて、よく思うことがあります。それは、「このアンケートは何人を対象にしたのだろうか？」ということです。

ニュース番組のアンケート調査で取り上げられるような話題は、それほど大きな問題ではないかもしれませんが、私はいつもアンケートの対象人数（母数）がどのくらいなのかが表示されていないかを探してしまいます。ある問題に対し賛成という意見の割合が、10 人に聞いて 5 人がそう答えたから 50%なのか、1000 人に聞いて 500 人がそう答えたから 50%なのか、では同じ 50%でも受ける少し印象が変わると思うからです。

精度をどこまで求めるかにもよるため、もちろん対象人数だけが重要ということではありません。しかし、人数の表示がなくパーセンテージだけを表示しているグラフを見ると、あまり信じる気になれない、というちょっと正直者ではない自分がいます。そんな考えで世の中つまらなくないのか、テレビなのだからもっと楽に見てればいいのに、とおっしゃる方もいるかもしれません。ただ、大学の社会調査の実習でアンケートの作成作業から調査までを行ったことがあり、設問の表現や選択肢の内容によってはアンケートの結果に影響が出ることを知ったので色々考えてしまうのです。調査後に結果をまとめるときにも考えることがたくさんありました。

アンケートを作る際にも、調査結果をまとめる際にも、気を付けなければならないことが実はたくさんあります。ちょっと正直でない目線で見ると面白いこともあると私は思います。

指標紹介　病床稼働率



2014 年の当院の病床稼働率は 91.9%であり、昨年比−0.6%となっています。数字だけを見ると、昨年に比べてやや空床があったという結果になっていますが、平均在院日数が昨年より短くなったことも関係しています。

病院の経営を考慮すると、稼働率は 100%に近いほど収入が多くなります。しかし、病床が一杯だと救急搬入された重症患者や、外来で当日に入院が必要と判断された患者を受け入れるための病床がなくなってしまうという問題があり、一概に数値が大きければ大きいほど良いとは言えません。
入院数と退院数のバランスを考えた病床の総合管理が重要となります。

2014 年度より「入退院支援室」が立ち上げとなり、長期入院患者の退院支援の強化や地域連携などその他の調整を行うようになりました。現在も 9 割以上の病床稼働率になっていますが、今後さらに病床稼働率の数字を高く保ちながらも、患者を受け入れる体制を今以上に整えることができるかもしれません。

QI 委員　診療サービス課　山本　あゆみ

シリーズ“統計のはなし”No.22

今回は病院稼働率・利用率についてお届けします。
まずは用語の定義のお話から。厚労省の用語の説明によると、「**病床利用率**」の名前で次のように定められています。

$$病床利用率 = \frac{在院患者延数}{病床数 \times 365} \times 100$$

在院患者延数が増えれば病床利用率は高い（良い）値になります。なお、ここでの「在院患者延数」は退院患者数を含まない延べ患者数です。また、年間の率なので 365 日が掛けられています。一方、「病床稼働率」は退院患者数を含む延べ患者数を代わりに用います。そのため、病床利用率より値が高くなり 100%を超えることがあります（午前に退院したベッドを午後の入院に利用するなど、重複が生まれるため）。混同されがちなので気をつけたいところです。

（参考: http://goo.gl/CDZ4w7）

さて、「在院患者延数」繋がりの指標に「平均在院日数」があります。式は以下のとおりです。

$$平均在院日数 = \frac{在院患者延数}{1/2 \times (新入院患者数 + 退院患者数)}$$

病床利用率と分子が同じです。つまり、病床利用率を高めるため、在院患者延数だけを増やそうとすると、平均在院日数も増えてしまいます（下図）。平均在院日数を短くしつつも病床利用率を高めるには、新入院患者数、退院患者数を増やさなければなりません。皆さんご存知なお話になってしまいましたが、数式を見比べて再確認してみました。

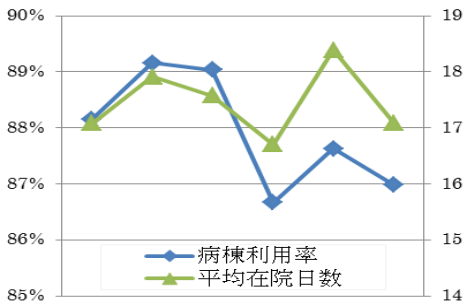


図. 病床利用率と平均在院在院日数の経年変化
（当コラム用にシミュレートした数値）

医療情報企画センター　SE　佐藤洋之

次号（第 23 号・7 月発行予定）のご案内

次回は引き続き指標紹介「入院患者の転倒・転落発生率」、シリーズ“統計のはなし”No.23 を予定しています。